アーツ ARTS 前橋 MAEBASHI

アーツ前橋の情報誌

&Arts

アンドアーツ

第18号

TAKE FREE ¥0

特集 「表現の森」

可能性を開く、表現のトビラ

Photo: 木暮伸也（Lo.cul.p）

INTERVIEW
滝沢達史 / 佐藤真人

アーティストコラム 地主麻衣子

SPECIAL ISSUE ひととひとを繋げる「表現」

表現の森

Forest of Expression

表現の森とは

アーティストと前橋市内にある施設や団体が協働することで表現の可能性を探る、アーツ前橋の5つのプロジェクトです。アートが福祉や教育、医療の現場に入っていくことで、どのような化学変化が起こるのか。多様性と複雑性にあふれる森のように、どんなことに出くわすかわからないワクワクとドキドキが「表現の森」には詰まっています。

表現の森　特設サイト
https://www.artsmaebashi.jp/FoE/

「表現の森」プロジェクトでは、美術ではなく表現について考えます。日常生活において、他の誰かに考えや想いを伝える手段として私たちは表現をしています。自分とは異なる価値観を認めることは、同時に自分の考えを社会の中で認めてもらうことかもしれません。そんなひととひととの関係を丁寧に観察するプロジェクトがこの「表現の森」です。

石坂亥士 ISHIZAKA Gaishi・山賀ざくろ YAMAGA Zakuro × えいめい

特定養護老人ホーム「えいめい」や、小規模多機能の家「じゃんけんぽん」にて行う、音と身体表現のワークショップ。即興的な石坂の神楽太鼓による音楽や山賀によるダンスに触れ、高齢者たちは昔の記憶を蘇らせたり、つい立ち上がって踊ったり。介護スタッフとも表現の喜びを共有し交流をはかりながら、介護施設における即興表現の可能性を考えています。

滝沢達史 TAKIZAWA Tatsushi × アリスの広場

「アリスの広場」は、ひきこもり経験者である佐藤真人によってオープンしたフリースペース。学校や社会へ行くことに困難を感じている若者たちが、自宅とは異なる外出先として自由に活用しています。アーティストの滝沢達史は、ここに通う若者たちと休館日のアーツ前橋で展覧会を鑑賞する「ゆったりアーツ」や、みんなで外泊をしてみる「ゆったりアウトドア」などを行い、同じ空間を共に過ごすことから見えてくる新たなコミュニケーションの実践を続けています。

★Photo: 木暮伸也 (Lo.cul.p)

中島佑太 NAKAJIMA Yuta × 南橋団地

中島佑太自身が幼少期を過ごした「南橋団地」。そこで暮らす子どもから大人までを対象に、対話と協働をもって働きかけるプロジェクトです。少子高齢化などの社会問題を抱えている団地という場所で、紙袋で靴を作って散歩したり、タイヤを転がしながら団地内を歩いたりとユニークなワークショップを試みながら、住民たちの想像力や表現力を引き出しています。

廣瀬智央 HIROSE Satoshi・後藤朋美 Goto Tomomi × のぞみの家

前橋にある母子生活支援施設「のぞみの家」と、ふたりのアーティストによるプロジェクト。2012年、子どもたちが前橋の空を写真に収めて手紙にし、ミラノ在住の廣瀬智央と交換する〈空のプロジェクト〉からはじまりました。その後始動した〈タイムカプセルプロジェクト〉では、四季に合わせて開催されるワークショップの記憶をカプセルに保存し、2016年から2035年まで継続します。2035年に開封し、当時を振り返るという長期的な試みです。

Port B × あかつきの村

前橋市西大室町にある「あかつきの村」は、1982年にベトナム難民定住センターとして、カトリック司祭の石川神父が始めた共同体です。精神障害を抱える難民を受け入れてきた歴史があります。演劇ユニットPort Bは本施設のリサーチやスタッフへのインタビューを行い、2019年に開催した「表現の生態系」展（※1）の館外プロジェクトとして展開。QRコードを「あかつきの村」に設置し、映像や音声を見聞きしながら散策ができるプログラム《続・前橋聖務日課　あかつきの村ウォーク》を制作しました。

（※1）アーツ前橋の企画展「表現の生態系　世界との関係をつくりかえる」（2019年10月12日〜2020年1月13日）。
「表現の森」の実践をふまえ、表現が持つ役割を歴史や地域性などの観点から再考した展覧会。31組のアーティストやプロジェクトを展示。

INTERVIEW

ここは、だれが来てもいい場所。

前橋市に拠点をかまえるフリースペース「アリスの広場」では、アーティストが当事者の方々とさまざまな形で関わる活動を長期的に継続しています。どうしてアートとフリースペースが出会うことになったのか、その現場はどのように動いているのか。アーティストの滝沢さん、そして「アリスの広場」代表の佐藤さんにお話を伺いました。

2020年1月8日収録
聞き手／市根井直規

「居心地のいい拠点があること」と「社会」とがつながれば、道筋は開ける。

滝沢達史 アーティスト

―「アリスの広場」での、滝沢さんの活動について教えてください。

みんなで美術部をつくったり、社会の中に気持ちよく引き込もれる場所を開発したりしています。とはいえ3年前に関わり始めた当初は具体的なプランが全く決まっていなかったので、まずは当事者のみんなの気持ちを引き出すための空気づくりから始めました。ただ自分が居るだけでは緊張させてしまうなと思って、卓球をしたり、料理をしたり。

そして2年目からは、外に出ることへのチャレンジをしてきました。「外に出たい気持ちはあるけど出られない」という方が多かったので、中之条町の温泉に行ったり、赤城山の森に引きこもったりすることを提案したんです。

―アーツ前橋を使った「ゆったりアーツ」、楽しそうだな……と思いました。

「休館日のアーツ前橋で、みんなで展示を見る」というイベントですが、これはとても好評で、他の美術館も真似したら良いと思っています。隣の人と同じ作品を見て「わかんないね」と話せばコミュニケーションが生まれるし、話さなくてもいい自由もある。不登校・ひきこもりと呼ばれる人たちと、どちらかというと閉鎖的な美術館は相性がいいのかもしれません。

社会との接点をもつために拠点をつくる

―「美術館へお勉強しに行きましょう」ではないのですね。

普段あまり口を開かない子が、文章で「アートは作品の外にある世界が輝く。見ている人たちが輝いている」と「ゆったりアーツ」を批評してくれたことがあって、まさにそうだなと。たとえば野球場でビールを飲む楽しみってあるじゃないですか。野球と会話の両方があって楽しむ野球。アートもそのように外野の楽しみ方がもっとあっても良いのでは無いかと思っています。

―このプロジェクトは、どのように発展してゆくことを目指していますか。

アリスの広場は「保護区」で、自分を取り戻す場所です。でも、そのあとの道筋がなかったので、今は社会との接点を考えています。アーツ前橋のブログの原稿を書いてもらうなど仕事を依頼してみたり、美術部を作ってみたり。活動を始めた当初は方向が見えない状態でしたが、いまはゴールが見えてきています。「居心地のいい拠点があること」と「社会」とがつながれば、アリスなりの道筋が開けると考えています。

―現在、新たな居場所を作っている最中だとか。

2020年で5年目となる現在、アリスの広場の拠点を前橋市の中心商店街にあるオリオン通りに移す準備をしています。セクシュアルマイノリティ支援団体「ハレルワ」とともに使う、「まちのほけんしつ」です。いま建物を改修しているところなのですが、自分たちの価値観で成り立っている空間がどんどん出来上がっている実感があります。誰が来ても良い、ルールもできていない場所を、手を動かして作るのは楽しいですね。

「アート」という言葉の使いかた

―アートと私たちの生活は、どのように関係してくるのでしょうか。

アートという括り方は、たしかに分かりづらいかもしれません。私は、出来上がる作品よりも「これをやったら面白いかな」、「別のところに移動できるかもしれない」と期待することに喜びを感じています。私がアリスの広場と共に歩んでいるのも、そんな気持ちからです。

しかし、あえて「アート」を使うことによって親和性が生まれることもあります。当事者たちは「引きこもり」「不登校」「LGBTQ（＊1）」といったような社会的なラベルで語られることが多いわけですが、それをアートとして語ることで開かれる可能性があると考えています。

（＊1）Lesbian（レズビアン、女性同性愛者）、Gay（ゲイ、男性同性愛者）、Bisexual（バイセクシュアル、両性愛者）、Transgender（トランスジェンダー、性別越境者）、Questioning（クエスチョニング、性自認や社会的な性、性的指向が確立できず自問している人）の頭文字をとった単語で、セクシュアル・マイノリティ（性的少数者）の総称のひとつ。（引用：「東京レインボープライド」公式WEBサイトより）https://tokyorainbowpride.com/lgbt/
https://tokyorainbowpride.com/magazine/lgbtqcourse/10419/

滝沢達史 TAKIZAWA Tatsushi

1972年横浜市生まれ。多摩美術大学油画専攻卒。東京都特別支援学校にて知的障害児への美術教育に携わった後、越後妻有トリエンナーレ（2015年）や瀬戸内国際芸術祭（2016年）などに参加。近年はアートと福祉が交差する活動を行っている。2018年より、障害のある子どもたちの放課後等デイサービス「ホハル」（岡山県倉敷市）の代表も務める。

Photo: 土屋ミワ（P4,P5）

身近なものではなかったアートやアーティストという存在が、実は良い関係で過ごせる仲間だと知りました。

佐藤真人 アリスの広場・NPO法人 ぐんま若者応援ネット理事長

それは、自分にとって必要な居場所だった

―「アリスの広場」開設までの経緯を教えてください。

私自身がまさに引きこもりの経験者で、当時から通っていたフリースペースとご縁があったからですね。私は体調が優れなかったことから、中学校に入学して2ヶ月くらいで不登校になりました。徐々に外へ出る練習を始め、1年間くらいかけて少しだけ出られるようになり、卒業直前に埼玉のフリースペースに顔を出すようになったんです。

そこで自分を取り戻すことができたので、高卒認定試験を受けて20歳で大学に入学し、大学院を出て東京で就職することにしました。しかし、そこでも壁にぶつかってしまって。上司が大声で怒鳴るタイプの人で、それをきっかけに半年で会社に行けなくなったんです。

その後、予備校に通いながら公務員試験を受けたものの全滅。「ああ、また元通りかな」と沈んでいたタイミングで、お世話になっていたフリースペースから「20代、30代の若者の居場所を新たに作ったので来てみないか」とお誘いをいただいて、少しずつ仕事をもらって社会と繋がっていくことができました。

その時に不動産会社の方と知り合い、私自身のストーリーを話した際に「空いてる場所があるから、フリースペースをやってみないか」と声をかけてもらったのが始まりです。

―フリースペースを運営することは、もともと考えていたのでしょうか？

いえ、最初は自分で立ち上げることは全く考えていませんでした。しかし、お世話になっていたフリースペースが活動をやめてしまうと聞き、どうにかしたいと思ったことがありまして。10代、20代と二度フリースペースを利用している私は、それが社会に必要な居場所であることを知っていましたし、そこで多くの方の努力や巣立ちを見てきました。そんな経験があったからこそ、立ち上げのお話をいただいた時に踏み出すことができたのかもしれません。

自由でいるための「臨機応変さ」

―「表現の森」プロジェクトが始まった時、アートやアーティストについてどんなふうに考えていましたか。

私自身、美術館などでアート作品を見たことはあっても、アーティストや学芸員の方々と実際に関わったことはありませんでした。当事者の若者たちにとっても初対面の人との会話はハードルになることが多いので、どんな反応があるだろうか、という心配もありました。

しかしそれは杞憂で、アーティストの滝沢さんや担当学芸員の方にはとても臨機応変に動いていただいたように思います。たとえばデッサンを描くために公園に行った際、最初は「鉛筆をナイフで削って、こんな感じでデッサンして…」という流れを想定していたんです。ところが途中で、紙に草花を擦って色を出している子を見て「そっちのほうが面白い！」となり、みんなでこれをやってみよう、となったことがあります。

―おおまかな枠だけを決めて、細かい流れは自由なんですね。

そうです。絵は描かずに写真を撮っていた子もいますし、何も作らなかった子もいます。学校みたいに「みんなで同じことをやりましょう」ではなく、滝沢さんがなるべく自由で居させてくれたことは、若者たちに良い影響をもたらしたのではないかと感じています。

決して身近なものではなかったアートやアーティストという存在ですが、実は良い関係で過ごせる仲間だと知りました。表現をし、作品を世に出している人との関わりは大切にしていきたいです。

子どもたちと歩んでいく、これからのこと

教育課程も教科書も、時代とともに変わる部分があります。「影で遊んでみる」「教室の中に糸を張り巡らせる」など、「造形遊びをする活動」に分類される授業などは、子どもたちが生き生きと学べる楽しい要素が盛りだくさんで興味深いです。しかし取り組みに差があるのも現状で。

―もうすぐ新しい拠点での活動が始まりますね。今後はどのような方向に進んでゆくのでしょう？

このプロジェクトが現在も継続していることに、とても意味があるように思っています。アーツ前橋とは「表現の森」を通して良い関係性ができましたし、オリオン通りに拠点が移れば物理的な距離も近くなりますので、アーツ前橋の事業ボランティアから社会復帰に繋げることができたら嬉しいな、と考えています。

2019年12月24日収録　聞き手：市根井直規

佐藤真人 SATO Masato

1982年生まれ。中学1年生から不登校となり、以後6年間不登校・ひきこもりを経験。フリースペースに通いながら17歳で大検予備校（現高卒認定試験）に通い始める。20歳で埼玉工業大学、その後明治大学大学院へ進学。卒業後、就職先を半年で退職し、28歳で再びフリースペースに通い社会復帰する。2014年から「アリスの広場」を開く。第3期群馬県教育振興基本計画策定懇談会委員。

COLUMN アーティストコラム

「作品と地域性」 地主麻衣子

私は今オランダのマーストリヒトという小さな街にいます。ここにはアーティストやデザイナーなどが1年間滞在制作できるプログラムがあり、日々それぞれのスタジオで仕事をし、お互いの作品を見せ合って批評しあうことをしています。先日終了した「表現の生態系」展で展示させていただいた《わたしたちは（死んだら）どこへ行くのか》の編集も、大部分はこの静かなスタジオで行いました。この作品は、誰しもが最終的には行き着く場所であるお墓を通して、現代の日本で生きる様々な人の話を聞いてみたい、特にあまり語られてこなかったような日本に暮らすムスリムや在日コリアンの方々の物語を知りたいという思いから作りはじめました。

前橋での展示が終わり、現在は3月のオープンスタジオでこの作品を見せるための準備をしています。日本で見せるのとは異なり、歴史的・社会的背景を共有していない人たちに果たしてこの映像が伝わるのか？と不安に思い、何人かの信頼できる友人たちに映像を見てもらったところ、その中のひとりがこんなことを言っていました。「ヨーロッパも他国を侵略した歴史があるし、いろんな文化的背景を持った人たちが一緒に住んでいる。だから、たとえ背景を完全には理解できなかったとしても、それを体験した人による生きた物語が語られているならば、自分の体験と結びつけて想像することはできる」と。すごくローカルな物語でもそこにリアリティがあれば伝わるんだな、ということを感じました。でもそこにリアリティを持たせるためには、いろんな工夫と試行錯誤が必要なのもまた事実なんですよね。

前橋でインスタレーションに使っていた藁むしろは、観客を映像の世界に導くための大事な導入だったので、今回もそれに近いものを使いたいと思っていました。農業大国であるオランダなので、きっと似たようなものがあるはずと思っていたのですが、見つけられたのはジュート生地、ココナッツ繊維、竹のすだれのようなものでした。これらはアジアやアフリカから輸入されたもので大量生産品の雰囲気があるし、手仕事感が残るものを探そうとするとAmazonでインド製のジュートカーペットを買うくらいしか選択肢がなかったのです。結局、日本からむしろを取り寄せるのが一番確実だし、案外安上がりであることに気づき、家族に頼んで送ってもらうことになりました。ローカルなものをインターナショナルな場で見せることの困難さと面白さを感じました。

地主麻衣子 JINUSHI Maiko

1984年神奈川県生まれ。個人的な物語をテーマとしたドローイングや小説の制作から発展し、映像、インスタレーション、パフォーマンスなどを総合的に組み合わせた「新しい種類の文学」を創作する。主な個展に「欲望の音」（HAGIWARA PROJECTS、東京、2018）「53丁目のシルバーファクトリー」（Art Center Ongoing、東京、2018）。主なグループ展に「表現の生態系　世界との関係をつくりかえる」（アーツ前橋、群馬、2019）「第11回 恵比寿映像祭」（東京都写真美術館、東京、2019）「Unusualness Makes Sense」（チェンマイ大学アートセンター、チェンマイ、2016）など。現在、ヤン・ファン・エイク・アカデミーに在籍中。

視点を変えれば この街はワンダーランド！ 前橋まちなかウォッチング

千代田町4丁目 オリオン通り周辺エリア

アーケードに差し込む光が幾何学的な模様を生み出します。

ちなみにTULOY PO KAYOはタガログ語で「いらっしゃいませ」的な言葉みたいです。

オリオン通りにほど近い渋谷。ここまで堂々としていると何も言えない。

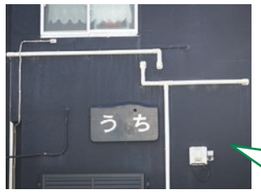
オリオン通りのキャッチコピーのバリエーション。明るくてふれあいがち。

なんの加盟店かは自分で考えよう。

「まちのほけんしつ」オープンに向けて改装中。のぞくと等身大パネルがいくつか。

怪しげなステッカーとグラフィティから若者の息吹を感じますね。

旧成光堂書店。実は小さな劇場が入っていて、舞踏の公演が開催されたことも。



真っ黒の壁に、真っ黒の看板、そして「うち」。シンプルに訴求します。

WORKS 収蔵品紹介

アーツ前橋では、令和元年度に18作家74点の作品を新たに収蔵しました。前橋市がこれまでに収蔵してきた作品は約820点になります。これらの美術作品は、市民にとって大切な宝ものであり、未来へ残して伝えていく贈り物です。ここではその中から一点を紹介します。

山口薫《沼のある牧場》
YAMAGUCHI Kaoru
昭和39（1964）年　油彩･カンバス
昭和56（1981）年度購入

抽象と具象のあいだで蘇る故郷の風景

アーツ前橋が開館する以前から、前橋市は群馬を代表する画家・山口薫の作品を2点所蔵していました。本作は、そのうちの1点で、横幅が2メートル半を超える大作です。中央には、深碧の沼が配され、その脇で親子の馬が戯れています。山口は、1940年代から繰り返し菱形の水辺を描いており、ここに描かれている沼も菱形のように見えます。

この沼は果たしてどこでしょうか？そのヒントが、京都の何必館という現代美術館にあります。この作品の直接的な下絵ではありませんが、「赤城大沼」（『山口薫全作品集』2011年、求龍堂、p.245 d-0057-1479）と題された非常に近い構図の下絵が残されています。彼の故郷の風景である赤城は、山口が繰り返し描いた沼というモチーフの一つのモデルだったのではないでしょうか。ただ、ここではそれぞれのモチーフは輪郭線を失い、色彩のみで描かれることにより、現実の風景から詩的な幻想風景へとその姿を変えていくのです。

山口 薫　YAMAGUCHI Kaoru　（1907 - 1968）
群馬県群馬郡箕輪村（現・箕郷町）金敷平の旧家に生まれ、高崎中学校在学中に油絵に出会う。1925年、東京美術学校（現･東京藝術大学）西洋画科に入学し、その画才を次第に発揮してゆく。1930年から3年間フランスに留学し、当時の前衛芸術の影響を大きく受けた。1934年に新時代洋画展、1937年に自由美術家協会、1950年にモダンアート協会を結成するなど国内の前衛美術を牽引した。1960年には第30回ヴェネツィア・ビエンナーレ展にも参加するなど、山口の活躍は日本国内にとどまらず、高く評価された。

ARTIST IN RESIDENCE 滞在制作アーティストの今

ARTIST
衣 真一郎
KOROMO Shinichiro
滞在期間：34日間
2017年8月29日-10月1日

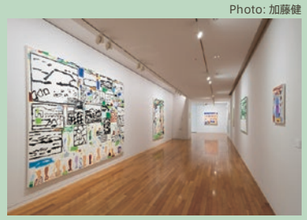
アイスホッケーの練習後。センター・クラークのアーティストのChristianさんと衣さん。

アーツ前橋では、群馬県にゆかりがあるアーティストを対象に滞在制作事業を展開しています。2017年度は群馬県北群馬郡伊香保町（現･渋川市伊香保町出身）の衣さんを招聘しました。

山や畑といった故郷に広がる風景や、静物、人などをモチーフに絵画と立体による作品を制作する衣さん。前橋の滞在期間中は、赤城山や市内にある古墳、大胡町出身の画家･横堀角次郎のリサーチを行いました。滞在中に描き始めた作品は、同年10月に開催された展覧会「BankART Bank Under35 2017」（BankART Studio NYK、神奈川）にて発表されました。

その後も東京での個展や海外の滞在制作事業に参加するなど、国内外で活躍を続けています。2019年の4月から6月には、トーキョーアーツアンドスペース（TOKAS）が主催する二国間交流事業プログラムで、カナダのケベックにあるセンター･クラークに滞在。カナダの風景や、国技でもあるアイスホッケーに関心を持ち、国立公園に足を運んでスケッチやドローイングを行いました。練習や試合を見学するだけでなく博物館を訪れたりと、カナダの人達とともに歩んできたアイスホッケーの歴史に触れ、衣さんは「この自然の中でこそ生まれた文化だ」と感じたそうです。また「広大な風景はどれも素晴らしく、私の中での風景や空間の捉え方にも影響があった」とのこと。新たな作品制作にもつながる、カナダでの充実したエピソードを伺うことができました。

Photo: 加藤健



東京オペラシティアートギャラリーでの個展「project N 75 衣真一郎」展示風景

●今後の展覧会・活動予定
・「榛名湖アーティスト・レジデンス」（4月～／高崎市）スタッフ兼滞在アーティストとして制作・活動予定。
・「トーキョーアーツアンドスペース レジデンス 2020 成果発表展」（7月～8月（予定）／トーキョーアーツアンドスペース本郷）に参加。

EVENT まちなかイベント情報

2020 Apr. - May

ya-gins vol.38
三宅感「あきらめの水位」
3 月 28 日［土］－ 4 月 26 日［日］
open 金・土・日 13:00 - 20:00
ya-gins

反町潤 個展
「can you see it ? vol.4」
5 月 9 日［土］－ 11 日［月］
12:00 - 18:00
map 前橋 "市民" ギャラリー

●前橋文学館スケジュール

「怖いを愛する
―映画監督・清水崇の世界展」
1 月 18 日［土］－ 5 月 6 日［水］9:00 - 17:00
前橋文学館 3 階　オープンギャラリー

「わたしたちはまだ林檎の中で眠った
ことがない
―第 27 回萩原朔太郎賞受賞者 和合亮一展―」
2 月 8 日［土］－ 5 月 10 日［日］9:00 - 17:00
前橋文学館　2 階展示室

※4 月 15 日まで休館、4 月 16 日より再開予定です。
開館・会期等の最新情報は公式 HP をご確認ください。
https://www.maebashibungakukan.jp/

SHOP

ROBSON COFFEE
アーツ前橋店

アーツ前橋の 1 階で開館当初から営業しているカフェ「ROBSON COFFEE アーツ前橋店」。千代田通りに面した明るく開放的な空間は、美術館利用者でなくても気軽に入れる、市民のために開かれた場所です。スタッフの本田さんは、上小出町にある本店のオープン時から働くベテラン。アーツ前橋店は当初「おしゃれな空間で緊張した」そうですが、「アーティストなど、それまで関わることのなかった人と会話できて刺激的な職場」と話してくれました。

EXHIBITION アーツ前橋 展覧会情報

廣瀬智央
地球はレモンのように青い

《空のプロジェクト：遠い空、近い空》2013 年
屋上看板 4 面、DVD ループ映像
アーツ前橋コミッションワーク
撮影：木暮伸也

2020 年 4 月 24 日［金］－ 6 月 28 日［日］
開館時間：10:00 - 18:00（入場は 17:30 まで）
休館日：水曜日
※4 月 29 日（水）、5 月 6 日（水）は開館／ 4 月 30 日（木）、5 月 7 日（木）は休館
観覧料：一般 500 円／学生・65 歳以上・団体（10 名以上）300 円／高校生以下無料
＊障害者手帳をお持ちの方と介護者 1 名および児童扶養手当証書お持ちの方は無料
＊5 月 10 日（日）は母の日のため無料

※当初の予定より変更しました。
今後も変更となる可能性があります。

イタリアを拠点に活動を続ける廣瀬智央（1963-）による、日本国内の美術館では 20 年ぶりの個展を開催します。アーツ前橋では開館前のプロジェクトとして、ミラノに住む廣瀬と前橋の母子生活支援施設「のぞみの家」の子どもたちと空の写真を交換し、当館の駐車場最上階にある屋上看板を再利用したコミッションワーク《空のプロジェクト：遠い空、近い空》を制作しました。その後も、前橋市内で福祉、医療、教育の団体等と協働するプロジェクト「表現の森」の 1 つとして、ワークショップや手紙のやりとりなどを続けています。

本展では、廣瀬がイタリア渡航以後に発表した初期の作品から国内未発表作品、そして新作までを含め、廣瀬のこれまでの活動をご紹介します。

本展の見どころ ➡

大量のレモンとその香りを用いたインスタレーション作品《レモンプロジェクト 03》（1997/2020）。圧倒的な数のレモンとさわやかな香りをぜひ会場で体験してください。

《レモンプロジェクト 03》1997 年　作家蔵
撮影：Tadahisa Sakurai　©Satoshi Hirose

主催：アーツ前橋　**協賛**：株式会社 資生堂 、株式会社原田・ガトーフェスタ ハラダ　**助成**：公益財団法人朝日新聞文化財団、公益財団法人アサヒグループ芸術文化財団　**協力**：ウンベルト・ディ・マリーノ・ギャラリー、 AGC 株式会社、株式会社アート、株式会社虎変堂、株式会社ユニオン、桐生大学短期大学部アート・デザイン学科、小山登美夫ギャラリー、高砂香料工業株式会社、横浜ディスプレイミュージアム　**後援**：イタリア大使館、上毛新聞社、群馬テレビ、FM GUNMA、まえばし CITY エフエム、前橋商工会議所

アーツ前橋　1 階ギャラリー

「糸の記憶　アーツ前橋所蔵作品から」

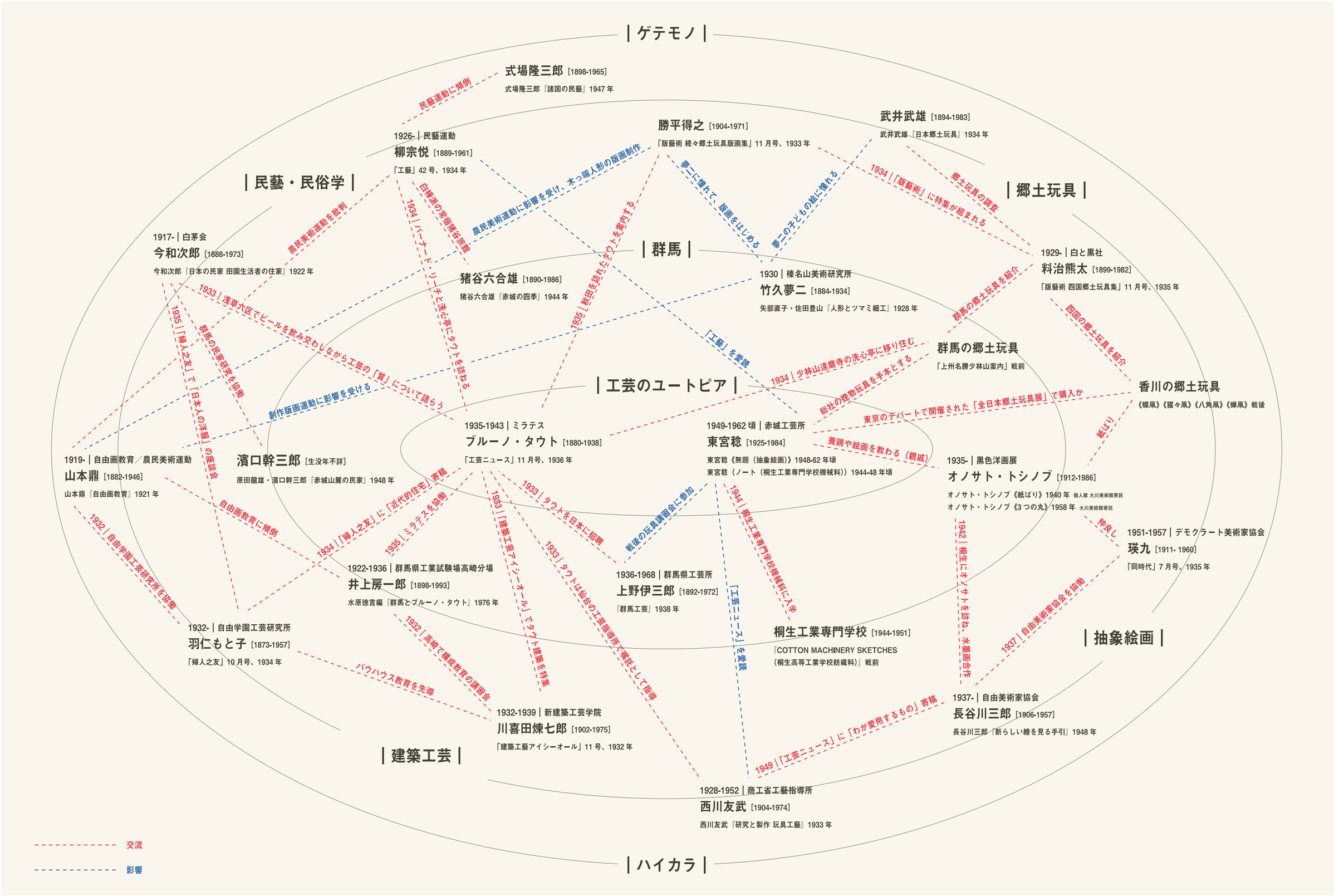
2020 年 4 月 24 日［土］－ 9 月 22 日［火］
※6 月 29 日（月）－7 月 1 日（水）は展示替えのため閉室。
開館時間：10:00 - 18:00（入場は 17:30 まで）
休館日：水曜日　観覧料：無料

アーツ前橋の所蔵作品をさまざまな切り口で紹介します。かつて生糸産業で発展してきた前橋。生糸や繭、養蚕から着ることをテーマに展示します。
※開館・会期等の最新情報は公式 HP をご確認ください。

&Arts ISSUE 18
アンドアーツ 第 18 号

発行：令和 2 年 3 月 31 日　企画・発行：アーツ前橋
アートディレクション・編集・デザイン：殿岡 渉（あしか図案）　取材・文：市根井直規　写真：土屋ミワ（本屋写真館）、木暮伸也（Lo.cul.p）　ロゴデザイン：荻原貴男

アーツ前橋　〒371-0022　群馬県前橋市千代田町 5-1-16　TEL：027-230-1144　FAX：027-232-2016



中村裕太《群馬工芸の生態系》2019 年